

身近な地域からの国際理解教育 —横浜・中華街を教材にして

神奈川県立六ッ川高等学校 青柳光茂

1. はじめに

本校の所在する横浜市は国際貿易港として栄えてきた経緯があるが、その過程の中で多くの外国人が居住してきた特色をもつ。なかでも華人の町である中華街は、国内は勿論、世界に散在する中華街の中でも最大規模のものとして知られている。

本校では1年生の必修科目として地理Bを履修させている。「楽しく学ぶ世界地理B」(帝国書院)の第4章「現代世界の諸地域と近隣諸国の調査」において、その中華街を教材に選び、地域調査の方法や分析、それを基礎に中国の文化や社会を中心とする地誌を理解できるような授業実践を試みてみたい。

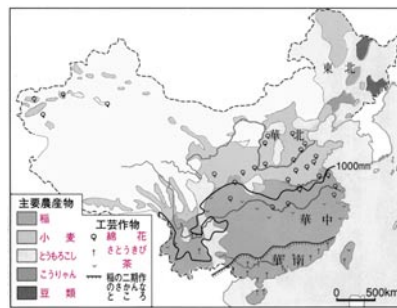
2. 中華街の華人の歴史と特色について知る

幕末に日本が開国し、横浜港が開港されると、米英仏などから大勢の商人が横浜を訪れ、外国人居住地(居留地)に商館を開いた。彼らは横浜進出に際し、中国人を伴ってきた。中国人は漢字によって日本人と筆談が可能のため、欧米人と日本人の間にたち、生糸や茶などの貿易現場で不可欠な存在となり、彼らが中華街華人のルーツとなる。その後、横浜と上海・香港との間に定期航路が開設されると、多様な技術をもった中国人が横浜を訪れ、明治初年には華人人口は約1000人にまで成長した。1899年、居留地が撤廃され、内地雑居が前提となると、日本人の職業保護のために、華人の職種も三刀業(理髪・洋裁・料理)など一定の職業制限が実施され、主として中華料理店(約200店舗)が増加する要因になることを理解させる。

また、華人の出身地を中国の地域で見ると、最も多いのが広東で、次いで台湾、福建、上海の順になっている。そこで「標準高等地図」(帝国書院)で広東省の位置と地形の把握をし(平野に乏しい丘陵状の地形など)、また、地域資料図(p.13~14)や教科書の「中国の生活」(p.88~89)でその地域の先進性・開放性について理解し、華人を多数輩出した要因について考察してみる。

3. 中国の食文化を知る

教科書の中国①「多様な自然と豊かな食材」(p.80~81)にある「現地レポート」で、中国四大料理の特徴を理解し、またその相関性を図⑦「中国の農業地域」で確認させる。その後、中華街に



▲⑦ 中国の農業地域(中国地図集 1996年版、ほか)

「楽しく学ぶ世界地理B 最新版」p.81

における中華料理店の種類とその割合を確認し、中華街に広東料理店が多い理由を考える。中華街の店舗については、インターネットの利用(教科書p.78のSKILLコーナーで基礎知識を学習したうえで)や、横浜中華街発展会協同組合などの資料が便利である。

4. 中華街における中国語の使用について知る

日本を生地とし、滞在年数も長い人々が多いことから、中華街の華人社会では、家庭内で日本語

しか使用しない人が44%を占めている反面、中国語のみという人も14%を占め、民族アイデンティティの高さを示している。しかし、職場（主として中華料理店）では日本語のみが32%、中国語のみが11%とそれぞれ減少し、日本語・中国語双方を使用する人口が大きな割合を示している。職場では日本と中国のそれぞれの出身者がいるため、双方が意思疎通のために歩み寄っていることなどが要因だと推測してみる。

また教科書の現地レポート（p.82）で中国語の発音の多様性を理解し、華人子弟のための民族学校（横浜には大陸系と台湾系の2校がある）では北京語での教育が行われていることも紹介する。

5. 中国の祭事と風水思想について知る

中華街では年間を通じ、中国の伝統的な祭事が催され、観光の目玉にもなっている。中国の正月にあたる春節はその代表的な祭事であり、その他にも、お彼岸にあたる清明節、三国志の英雄・関羽の生誕を祝う関帝誕、収穫祭である中秋節など多種多様である。教科書p.83を用いて、日本の年間行事との相違点に着目して学習したい。



「楽しく学ぶ世界地理B 最新版」p.79 ②春節の祭り

中華街には中国の風水思想に基いて「東南西北」に牌楼が建立され、それぞれの牌楼には邪気や悪災を防ぎ、内部の繁栄と安全をはかり願う守護神として四神が据えられている。牌楼は陰陽五

行に基く色調である青赤白黒で彩られている。四つの牌楼と守護神、色調は以下の通りである。

〔東〕朝陽門…日出を迎える門を朝日が街全体を覆い繁栄をもたらす。青龍神、青。

〔南〕朱雀門…厄災を払い、大いなる福を招く。朱雀神、赤。

〔西〕延平門…平和と平安の安らぎが末永く続くことを願う。白虎神、白。

〔北〕玄武門…子孫の繁栄をもたらす。玄武神、黒。

風水思想では、時間と方位を関連させ、時間の移り変わりとともにその方位の守護神が入れ替わり、四つの門の内部を守るとしている。つまり中華街を24時間365日を途絶えることなく守護神の下におくという発想である。これは子孫代々までの繁栄を願った漢民族の知恵の継承であり、真の中国文化を継承させるという、中華街の使命でもあることを理解させる。

また、中華街には関羽を祭る関帝廟があり、簿記の発明者であり、義を重んじ誠を尽くし約束事を守る関羽の精神が商人にとって大切であることから、商売の神様として信仰を集めていることも知る。

6. おわりに

以上のように中華街という地域を教材に、地域の文献資料や統計資料あるいはフィールドワークを通じて、近隣の外国である中国の多様な文化を体感することが可能である。国際理解教育とは単なる知識の習得や語学学習に終始するのではなく、偏見をもたずに異文化を尊重し、共有することが何より大切なことである。地理を教育する者として、常に生徒に対し偏狭なナショナリズムに陥ることなく、人間愛に根ざした真の国際理解を実践していくことが重要であり、それこそが最大の使命であると考えている。